

勝善寺舊址

黒石山勝善寺古址記

此の地、勝善寺旧址たり。勝善寺、本は天台宗に係り僧永範の開基するところなり。謹んで古記を按ずるに、鎮守府將軍

源義家の末孫に又太郎頼綱という者あり。其の子、與次郎

昌綱と称す。信州井上城に居し、因って井上をもつて氏と

なす。昌綱、故あって士籍を去り比叡山に登り僧となる。永範

と更名す。漫遊多年にして、建久紀元、我が安房国檢儀谷原

黒石山の地を卜し、榛莽を披き荆棘を斫り、始めて一字精舎

を建て、名づけ曰く、黒石山龍燈院勝善寺と。元仁紀元、親

鸞聖人、伊豆より安房に航す。偶、颶風に遇い舟將に覆没

せんとす。聖人、即ち六字の名号を書して海に投ず。風波忽

ち止み舟を龍島に繋ぐ。仍つて勝善寺に来たり、自ら袈裟を漉

いて松樹に掛く。其の松、袈裟掛松と曰い、其の井を御手洗

の井と曰い今に猶存す。永範、聖人に帰依し弟子となり、明空

と改名す。聖人、感ずるところ有りて、自ら仏谷の竹を截り
阿弥陀佛像を作り明空に授く。所謂、籠阿弥陀如来、是れなり。
天正八年、堂宇罹災す。因つて腰掛けに移る。俗に天正屋敷
と謂う。慶長年間、幕府の命をもつて、また二部村仏谷の地
に移れども、籠阿弥陀如来は仍つて腰掛けに安置す。今、古本尊
と称し、もつて崇敬す。爾来、黒石山、泯滅して知る者罕な
り。唯、青山翁鬱として灌木参天するを看る。前は則ち豆相
の海烟波滉漾渺として際無きが如し。梢下林間に一大石あり。
黝黒にして大きき十餘圍。ゆえに黒石山と称す。石上、古松
あり。磊柯盤屈して蚪龍の騰天するが如し。所謂、袈裟掛松な
り。其の東、泉あり。清瑩潺々として石罅より出ず。所謂、
御手洗の井なり。頃日、同志の者、相議り石に勒して聖人の旧跡
をして後世に伝はらしめんと欲し、文を余に属す。余や、開祖
の統二十有六世をここに継ぐ。七百余年後に生まれて法門隆盛
の時に遇い、また、この挙に会う。何の幸かこれに過ぎん。つ
いに不文を顧みず其の概略を記す。

明治二十九年秋九月 勝善寺第二十六世井上弘昌撰す

正四位文學博士重野安繹額を篆す 榴堂東南家賢書す

本鶴仙鐫る

勝善寺舊址

黒石山勝善寺古址記

此の地は、勝善寺の旧址である。

勝善寺は、本は天台宗に属し僧永範が開基すところである。謹んで古い記録を調べてみると、武芸の誉れ高い鎮守府將軍源義家の末孫の又太郎頼綱の子、與次郎昌綱は、信州井上城に居住し「井上」を氏としていた。昌綱は、事情があつて武士身分を去り比叡山に登り僧となり、永範と名のつたということである。

永範は、多年にわたり諸国をめぐり、建久元年（1190年）に安房国検儀谷原黒石山の地を選び、雑木林や草むらを伐り開き一字の精舎（寺院）を建立した。これが黒石山龍燈院勝善寺の始まりである。

元仁元年（1224年）に、親鸞聖人が伊豆国から舟で安房国へと渡ろうとした際、つむじ風が吹き舟が転覆しそうになった。親鸞聖人は、南無阿弥陀仏の六字名号を書いて海に投げ入れると風波はおさまり、舟は安房国龍島に着いた。

親鸞聖人は、やがて黒石山勝善寺にたどり着くと、自ら袈裟を洗つて松の木に掛け乾かした。その松の木を、「袈裟掛松」と言う。その時に水を汲んだ井戸を「御手洗井」と言い、今も存在している。

永範は、聖人に帰依し弟子となると、明空と名を改めた。親鸞聖人は、感ずるところがあつて自ら仏谷の竹を截り、阿弥陀仏像を作り、明空に授けた。それが現在は大勝院に祀

られている「籠阿弥陀如来」である。

天正八年（1580年）に、本堂が火災に遭い焼失した。そこで勝善寺は、ふもとの検儀谷腰掛けに移転した。俗に「天正屋敷」と呼ばれているところである。さらに慶長年間（1596年～1614年）に、幕府の命令で現在地二部村仏谷の地に移転した。しかし籠阿弥陀如来は腰掛けに安置し、今も古本尊として崇敬している。

その時以来、黒石山の地は人々から忘れられ、ただ青山は鬱蒼とし灌木が生い茂り、黒石山上から遠く見渡せば、伊豆国相模国が霞んで見え、海は渺々と果てしなく広がり際無きが如しである。

その木々の梢の下に一つの大石がある。青黒く大きさは十余圍ほどある。それを「黒石山」と称している。その石の上に古松がある。曲がりくねった大きな枝は頭の大きな龍が天に騰がるように見える。それが袈裟掛松である。その東に泉があり、清らかでつやつやとした水が石の割れ目からきらきらと流れ出ている。それが御手洗井である。

同志の者と相談したところ、ここが親鸞聖人の旧跡である。と石に刻んで後世に伝えようと、私に文章は任された。私は、開祖明空の法統二十六世を継ぐ者である。七百余年後に生まれ法門隆盛の時に遇い、さらにこの挙に会う。これ以上の幸せはあるだろうか。そこで文才の無いことを顧みず勝善寺旧址の概略をここに記した。

明治二十九年（1896年）秋九月

勝善寺第二十六世井上弘昌文を作る。

正四位文學博士重野安繹額を書く。

榴堂東南家賢て字を書く。

本鶴仙字を鐫る。